

中学部一年A組

サッカー全国大会

吉田 龍一

僕は夏休み中に、コロラドで開催された、アメリカのサッカー全国大会に出場しました。七月中旬のコロラドは、寒くもなく暑くもなく、サッカーをするのにちょうどいい天気でした。

今回の大会では、初戦に勝てるかどうかで、決勝トーナメントに進める可能性が大きく変わるので、絶対に初戦に勝つ必要があります。でも僕たちは運が悪く、初戦で、大会で一番強いチームと対戦することになってしまいました。案の定、七対二で大敗してしまい、僕たちのチームはグループ最下位に落ちてしまいました。それでもあきらめずに、次の試合に挑みました。

二試合目は、相手があまり強くなく、五対一で勝つことができました。僕はこの試合で、一点決めました。そして、決勝トーナメント進出がかかった三試合目では、先に相手に点を取られましたが、僕のゴールで追いつき、一対一で前半を終えました。後半に一点を追加しましたが、また相手に追いつかれてしまい、「このまま引き分けかー。」と思ったところで、味方が運よくゴールを決め、三対二で勝つことができました。僕たちはグループステージを三位でギリギリ通過しました。

準決勝では、味方のミスで先制され、さらに、僕たちが決めたはずの二点が、オフサイドで取り消されるなど、苦しい展開が続きました。しかし、味方のフリーキックとすごいミドルシュートが決まり、二対一で勝って決勝進出を決めました。

そして決勝戦では、なんと初戦で大敗したチームと、また対戦することになりました。「今度こそリベンジだ！」という気持ちで試合に臨みましたが、相手はやはり強く、五対〇で負けてしまい、結果はアメリカ全国

大会準優勝となりました。

この大会を通して、僕は二ゴールアシストという成績を残すことができ、個人的には、良くプレーできたと思います。しかし、アメリカ全国大会のレベルの高さを実感し、もっと練習が必要だと感じました。来年こそは優勝したいと思います。

私の水泳

多武良 優花

私は先週の木曜日にスイミングクラスで一番上の級の十級に合格しました。

私の通っているスイミングクラブは、水泳を教えてくれるのが、一級から十級まであります。私が今回合格した十級は、この中の一番上で、百メートルのクロールと、百メートルの個人メドレーを、それぞれ何分以内に終わらせるということでした。十級に上がったばかりの時は、百メートルの最後の方で疲れてきて、向こう側まで行き着くかなと、心配するくらいでした。けれども、今ではそんな事を心配しなくても、普通に泳げるようになって、泳いだ後も、初めの頃ほど疲れたりしなくなりました。

私は今回、十級を合格したので、次は「フューチャースター」という、もつともつと速く泳げるようになるためのクラスに入ることになりました。もうそこでは、泳ぎ方を教えてもらったり、ターンの仕方を習ったりということにはせずに、速く泳ぐ練習をします。そしてその後、本当に競い合う選手クラスに行くことになるので、そのために、このフューチャースターというクラスがあります。フューチャースターが隣でやっているのを見てみると、とても大変そうで、私にできるかなとも思います。でも今は、そのクラスに人数の空きが出るのを待っていて、まだ十級にいます。だから、その間にフューチャースターに行く準備ができるとう良

いす。

今はまだまだ、フューチャースターに行けそうなほど、自分の準備ができていないけれど、がんばって練習して、人数に空きがでるまでに「できる」と思えるようになっておきたいです。私は水泳が好きで、日本で幼稚園生のときからやってきたので、これからも続けられると良いなと思います。

茶道教室

浅井 啓太

僕は、中学に入って、茶道部に入りました。茶道部に入る前の僕は、正直に言うと、「お茶を点てるなんて、ちょっと地味かもしれない」と思っていました。でも、今では茶道部に入って、本当に良かったと思っ

す。

最初のころ、僕はお点前の手順をあまり覚えられませんでした。お茶を点てるときの動きにほ、お茶碗の向き、帛紗裁き、お湯の入れ方、そして、お客様へのお辞儀の仕方、どれも丁寧に正しくなければいけません。

先輩たちは、ゆっくりとした動きで、とても綺麗にお点前をしています。それを見て、「僕もあんな風にできるようにになりたい！」と思いました。

でも、実際にやってみると難しくくて、帛紗裁きで何度も失敗したり、お茶碗を回す方向を間違えたりしました。最初のころは、先輩に何度も「間違えてるよ」と言われて、少し落ち込んでしまいました。

そんな時、ある先輩が僕に、こう言いました。「私も最初は全然できなかったよ。でもね、失敗してもあきらめずに続けたら、ちゃんとできるようになるんだ。」

その言葉を聞いて、僕はびっくりしました。いつも上手にお点前をしている先輩も、最初はうまくできなかったなんて思ってもいなかったからです。同じように失敗しながら、少しずつ成長してきたと知って、僕は

気持ちが悪くなりました。それから、失敗して少し落ち込むこともありましたが、「僕もきつとできるようになる」と思って練習を続けました。一つ一つの動作を大事にしているうちに、少しずつ手が自然と動くようになっていきました。

夏休みには、職員室にいる先生方にお茶を振る舞う会がありました。僕は先生方の前でお菓子やお茶の飲み方を説明しました。また、最初の出入りの時の案内役をしました。特に役目がないときは、水屋という裏で先生方のお菓子を準備したり、お茶を点でて先生方にお出ししました。先生方が職員室に戻るときに「おいしかったよ。」と笑顔で言ってくれたとき、心の中が温かくなりました。

茶道部に入って、僕は「失敗してもいい」ということを学びました。大切なのは、諦めずに続けることです。そして、茶道では相手を思いやる気持ちもとても大事です。それは、普段の人生に生かせることだと思います。

激しいハイキング

貝原 絆斗

十一月の終わりに、一週間くらいのサンクスギビング休暇がありました。僕はこの一週間の間に、二つの州に行きました。それはアリゾナとユタです。

アリゾナではいろいろな景色を見ることができました。いろいろな山に登ったりして、すごく疲れました。その上、山に登る時には、斜面も急で、足も震え、怖かったです。山の上から下を見ると、下に見える人たちは、アリミたいに小さく見えました。そこから見る夕日は、今まで見たこともないくらい、きれいでびっくりしました。

この旅行で一番面白くて、怖かった経験は、一人で森の中で迷子になったことです。その日、両親の友達と一緒にハイキングをする予定でしたが、当日の朝、妹の体調が悪く、ホテルからの出発が遅れてしまいま

た。少し休んだら、妹の体調も良くなったので、予定より一時間遅れて出発しました。僕は両親の友達に早く追いつきたい気持ちが強く、焦ってしまい、両親や妹、弟のペースに合わせず、一人でハイキングコースを進んでいきました。

途中で家族の姿が見えないことに気づきました。しかし、少し待っても追いついてくる様子もなく、ハイキングをしている人も周りにあまりいなかったのです。ずっと待っていると、熊が現れるかもしれないと思い、そのまま進むことにしました。ハイキングコースの終わりに近づいても両親の友達には会えず、おかしいな、と思っていたところ、父と弟が追いついて来て、すごく叱られました。その時初めて、通ってきた道が一本道ではなく、途中で道を間違えてしまっていたことを知りました。父と弟は僕を探して三十分以上歩いて来たそうです。

正しい道に戻るために、来た道に戻っていると、母と妹も後から探しに来ており、母からも叱られました。自分勝手な行動をとってしまった事をすごく反省しました。その後、正しい道に戻り、山登りをして、ホテルに帰りました。その日はサンクスギビングだったので、ホテルで両親の友達とターキーを食べました。叱られたり、いろいろあった一日でしたが、ごはんはとてもおいしかったです。

この旅行で、合計八時間位ハイキングしました。とても疲れたけれど、今まで経験したことがなかったのでいい経験をしました。また新しいことを習いました。それは焦らずに、最初に、人の話をよく聞くということです。

美術館見学の日

安藤 航人

ぼくは、日本語補習校の社会科学見学で、ヒューストン美術館に行きました。実は、ぼくは小学校で一度行ったことがあるので、これで二度目になります。

ヒューストン美術館は一九九六年に設立されました。六つのラボに分かれていて、約五百人のスタッフが働いています。

ラボの中にも様々なラボがあったのですが、特に興味を持ったラボは、写真や紙などのラボです。ここでは、和紙の種類を教えてください、写真からどのようにして情報を得たり、繊維でできることを調べたりしていました。ぼくは、このラボで、絵にはいろいろな保存の仕方があるのだということを知りました。

美術館では、スタッフオンリーの場所にも入ることができました。例えば、スタッフしか乗れない搬送用のエレベーターに乗ったり、スタッフしか入れないラボをのぞくことができました。

中でも、写真の研究ラボはとても興味深い内容でした。和紙は大きく分けて三種類あるそうです。がんび(雁皮)、みつまた(三極)、とこうぞ(楮)です。がんびは、ふると音がなります。みつまたは、スコープのぞくと、三つ線が見えます。こうぞは、一番大事な和紙です。ぼくは、和紙にも種類があることに驚きました。

ぼくは、これで二回目の見学でしたが、通常の見学では見ることでできなかった所や、新たな展示物を見ることができたので、前回とは違い、また新しいものを見ることができて、楽しかったです。美術館は、来る度に新しい発見があるので、また来たいです。

家族と一緒に香港へ

リン 愛唯

七月五日から十一日まで、家族と一緒に香港へ旅行へ行きました。今回、香港へ行くのは初めての旅で、とても楽しみにしていました。

香港デイズニールランドでの体験が、今回の旅行で一番の思い出になりました。理由は二つあります。一つ目は、お店に売っている商品が、とてもかわいかったからです。アメリカのデイズニールランドとは違って、ダッフィー&フレンズの商品が多く売られていました。私の中で一番

好きなキャラクターはジェラトニーという猫のキャラクターです。ダッフィーとジェラトニーは、イタリアの町で、ダッフィーが落としたジェラトニーを使って絵を書いたことがきっかけで友達になったそうです。私は、ジェラトニーのバッジ、耳のカチューシャ、ぬいぐるみキーホルダー、そしてスマートフォンのケースを買ってもらいました。

二つ目は、アトラクションです。特に好きだったのは、ビッグ・グリズリーです。このアトラクションは、香港・デイズニーランドにある人気のジェットコースターで、世界のデイズニーの中でもここにしかありません。グリズリーマウンテンという山の中にある金を掘る鉱山がテーマになっているそうです。面白いところは、急に後ろ向きに進んだり、思ってもいない方向に動いたりするところです。とてもびっくりしましたが、楽しくて三回も乗りました。

初めての香港・デイズニーランドはとても暑く、ハンディファンが手放せませんでした。キャラクターパレードでは、ジェラトニーを見ることでできてうれしかったです。

一番おいしかった食べ物、トイストーリーランドにある、パイナップルアイスクリームがのっているイチゴスムージーでした。気温のせいでもらった瞬間に溶けてしまいましたが、暑かったせいもあり、ひんやりとして、とろけるほどおいしかったです。

今回の旅行では、家族とたくさんのお出でを作ることができました。他にも、香港市内では、床が透明なガラスのケーブルカーに乗ったり、ずっと行きたかったポップマートのお店に行ったりしました。本場のエッグタルトもサクサクで、一時間近く並びましたが、とてもおいしかったです。特にデイズニーランドでは、大好きなキャラクターグッズを買えたり、他のデイズニーにはないスリルのあるアトラクションを体験できて、嬉しかったです。またいつか家族と一緒にいきたいです。

裁縫の授業で難しかったこと

榎原 咲央理

私は最近現地校の家庭科の授業で、ミシンや手縫いを使ったモノづくりをしています。そして今は、ドーナツのキーホルダーやクッション、ズボンを作っています。私が裁縫をしている中で、難しいなと思ったことは、主に二つあります。

一つ目は、ミシンの扱いです。ミシンは、糸のつけ方を少し間違えたり、縫い始める前の工程を飛ばしたりするだけで、すぐに詰まってしまいます。また、詰まらずに縫い始められたとしても、程よい速さで変な方向に、布が曲がらないように調整しつつ、安全面などにも気を配らなければなりません。このように、ミシンを使うときには、同じタイピングで意識しなければいけないことがたくさんあるため、一つを忘れてやり直しているうちに、三十分たってしまうことが、たくさんありました。

二つ目は、糸を均等に縫うことです。私はドーナツのキーホルダーやクッションの綿を入れる部分などを手縫いしていたのですが、その際に、針を一定の間隔で刺していけないとすぐに見栄えが悪くなってしまうます。しかし、どれだけ意識しても均等にならなかつたり、均等にすることに夢中になりすぎて、最後に結び目を作る分の糸を残すことを忘れて、最初からやり直しになったりしてしまうことがありました。そのうえ、手縫いは同じ大きさのものを縫うだけでも、ミシンよりはるかに多くの時間がかかるため、限られた時間で間隔を均等にすることはとても難しかったです。

このように、私が裁縫をしていて難しいと感じたことは、たくさんあります。しかし、やっていて楽しいこともたくさんあり、作っていたものが出来上がった時の達成感もすごいので、今、難しいと思っていることが、簡単にできるようになって、さらに、裁縫を楽しめるよう、がんばりたいです。

小岩 志津香

私は授業で「大人になれなかった弟たちに」を学びました。戦争の最中に食べ物がなく、ミルクが足りない弟が亡くなっていった話です。作者の「僕」の視点が書かれています。

僕の母は、彼がヒロユキのミルクを飲んでいることをすでに知っていたと思います。それは、いつもヒロユキのためでした。「僕」はおなかですすぎで、自分を止められませんでした。母は、ヒロユキが助からなかつたのだと思います。家事をいつも手伝ってくれた息子、そして、小さい子どもの中で、母は、僕を失いたくないと思っていました。彼女は全てを失った後に、僕を失うわけにはいかなかったのです。たぶん、夫、家、プライドなどを彼女は失ったかもしれません。彼女には支えが必要でした。だから、もしかしたら、彼女はすでにヒロユキをあきらめていたけれど、子どもたちにはそう思っていたことを、知ってほしくなかったのかもしれません。

ここで悲しい罪悪感が生まれます。もちろん母は子ども達に生き残ってほしいと思っています。しかし、それは戦争の時代には非現実的です。彼女自身の子ども達を自分自身よりも優先しました。それでも、結局生き残ったのは、僕と妹の二人だけでした。彼女は、僕がミルクを飲んでいないことを知っていたにも関わらず、止めなかったことに、罪悪感を感じていたかもしれません。僕も、僕がミルクを飲まなかったら、弟は生きていくかもしれないと思う罪悪感。

戦争と不必要な罪悪感。

神谷 和咲

私は、今年の運動会で、ずっとやってみたいと思っていた放送係を担当した。読みたいパートは取れなかったが、与えられたパートを本気で練習し、ついに本番を迎える。優しい先輩の方に迎えられ、放送席に座って息を吸い込むと、緊張で胸が高鳴った。

運動会が始まり、全校生徒による競技開始を告げるホイッスルが響く。実況のペースは想像以上に速く、初めは意味不明な言葉を口走ってしまったが、何回もやるうちに、レポートを考えられるようになった。第一部では実況のみだったが、第二部からはアナウンスも担当する。練習通りにはいかないが、先ほどまででわかった、「はつきり読まないと言葉が曇る」ということを意識し、聞こえやすさとイントネーションを考えながら原稿を手取る。「次はプログラムの番号三番、小学部四年生によるデカパンGOGO!です」これは弟の競技だ。あとでからかわれないよう、本気でセリフを読む。「みなさん、頑張ってください!」読み終え、マイクを切った瞬間、達成感と、少しの羞恥が押し寄せる。先輩が励ましてくださり、安心して実況に取り掛かることができた。大事な場面が見えないハプニングもあったが、何とか最後まで声を出すことができた。

その後も順調に進み、いよいよ運動会一番の醍醐味、紅白リレーが始まる。友達も出場するので全力で応援したい。トップバッターで実況することになり、友達と約束したセリフを力強く声に出す。喉は傷んだが、応援の楽しさのほうに勝った。今になっては、全体的に興奮しすぎてしまったと反省しているが、それもいい思い出になったと思う。

結果は紅組の勝利。練習や応援を頑張った甲斐があった。来年も運動会に参加できると信じて、これからも私の「声優になる」という一つの夢に向けて実況やセリフを練習していきたいと思う。

シンプルに見えてシンプルではない三角形

江花 泰輔

三角形は数学の問題によく出てくるだけの図形と思われがちである。通常、幾何学的な数学の問題によく使われ、「五心」の不思議やどんな図形にも分解可能な性質、定理が抱負など問題を解くうえで大活躍している。

しかし、この図形は、見た目ほどシンプルではないのである。調べてみると数学の問題以外にも様々な三角形が身近なところに使われていることがわかる。

紀元前二世紀ごろ三角形は発見され、その当時は完璧な図形とされていた。「3」という数字は古代で始まり、「始まり・中間・終わり」を表し、新たな創造や発展、成功のイメージを与えていた。そして、音楽の三拍子もこの発想の元、古代の人たちが考え出したものだといわれている。現代とは程遠い、古代の時代から三角形は人間の暮らしに深くかかわっていたのだ。

意識して見てみると、デザインで視線を誘導する効果があったり、携帯性にすぐれたりと日常面でも活躍していることが多い。鋭い先端は「モダン」「おしゃれ」「奇抜さ」を演出し、有名ブランドプラダのマークにも使用されている。また尖った形状により頂点に向かって視線が集中するため、道路標識の「止まれ」「歩道」にも使用されている。他にもおにぎりやサンドイッチ、アイスクリームのコーンなど、その特徴を活かしたデザインを見ない日はないだろう。

また、建築においても非常に重要な役割を果たしている。三角形は他の図形と比べて比較的丈夫な図形である。外力を加えても曲がったり、崩れたりすることがない。トラス構造という言葉聞いたことがあるだろうか。トラス構造とは、細い棒や柱を三角形につないで組み合わせることで、大きな力を効率よく支える構造のことをいう。その丈夫さから東京スカイツリー、東京タワーの鉄塔の骨組み、体育館やスタジアムなどの屋根の支え、鉄道橋など様々な建築物に採用されている。

このように、三角形は人類の進化とともに使われ方が発展し、人類にとって身近で、なくてはならない図形となっていることがわかる。シンプルな図形でありながら、とても奥深い性質を持っているからだ。みなさんも、三角形の隠れたすごさを探してみてもいいだろうか。

絵の隠れ家

若尾 諭詰

十一月八日、中学一年生はヒューストンの美術館見学に行きました。

この見学の中で一番すごいと思ったことは、ラボとか普通の人が知らない美術館の裏側でした。大きいエレベーターや、どうやって絵の額を作るのかなどを見て、とてもかっこいいと思いました。

また、絵とそのまわりの仕事との関係が面白かったです。自分で作ったものだけを使うことや、インクが絵に当たらないように、その部分を切ることなど、とても勉強になりました。

次に美術館に行く時には、絵の裏側のことを思い出したいと思います。そうすることで、絵を鑑賞することがもっと面白くなると思います。美術館の絵に、そんなに重要な部分があったなんて、思いもよらなかったです。

「君の名は。」を読んで

成瀬 結希

わたしは「君の名は。」という本を読みました。この本は、東京に住む、高校生の瀧と、田舎の町に住む、三葉という二人のお話です。ある日、二人は寝ている間に体が入れ替わるといふ不思議なことが起こります。最初は、戸惑いながらも、メモやスマートフォンを使って連絡をとり、少し

ずつ、お互いの生活や気持ちを知るようになります。

この本で、私が一番心に残ったのは、「つながり」という言葉です。二人は会ったことがないのに、体が入れ替わることで強い絆を感じるようになります。特に、瀧が三葉を助けたいと思つて、町を探し続ける場面に、私はとても心を動かされました。時間や場所がちがっても、人とは心でつながることができるということに感動しました。

また、このお話には「記憶」や「運命」という大切なテーマもあります。名前や出来事を忘れてしまつても、大切な気持ちは消えないというところに、私は、自分の生活を重ねて考えました。日々の中で出会う人や思い出も、形は変わつても、心に残り続けるのだと思います。

この本を読んで、私は「人とのつながりをもっと大切にしたい」と感じました。ふだんの生活では、忙しさや距離のせいで、人との関係を軽く考へてしまうことがあります。でも、このお話を読んで、つながりは時間や距離を超える力を持つていると知りました。

また、この本を読むことで自分の生活を振り返る機会になりました。私には、遠くに住んでいる友だちや家族がいます。なかなか会えないけれど、手紙やメッセージで連絡を取っています。会えなくても、心はつながつていて感じます。この本を読んで、その思いがもっと強くなりました。人と人とのつながりは、目に見えなくても、確かにあるのだと思います。

「君の名は。」は、不思議な物語ですが、私たちにも大切なことを教えてくれる本です。友情や愛、そして、人との絆について考えさせてくれるこの本を、ぜひ、多くの人に読んでほしいと思います。

二週間旅行

工藤 風紗

私は夏休みの間に旅行に行ってきました。たくさん移動で疲れましたが、とても楽しく、いい思い出になりました。

最初は、フロリダに向かい、ウォルト・ディズニー・ワールドに行きました。アメリカのディズニーは四つの場所に分かれているのですが、私たちは全部の場所に行きました。ジェットコースターなどの絶叫系は怖かったのですが、乗り終わった後は、楽しかったと思えました。遊び終わった後にパレードを見ました。花火がドーンと大きな音を立てて、綺麗に落ちていった時は、迫力がすごかったです。

次に行ったのは、フロリダ州の南東部にあるマイアミ・ビーチです。とても綺麗だったのですが、浜辺に昆布のようなものがたくさんありました。マイアミ・ビーチではヨットや船などを見ることができました。他にも大きな鳥が海に飛び込み、魚を捕っているところを見ました。マイアミ・ビーチの他にもマイアミ・アクアリウムにも行きました。イルカやアシカのショーを見て、動物は本当にすごいなあと思いました。

最後にキーウエストに行きました。キーウエストではサンセットを見に行ったのですが、天気が悪くて見ることができませんでした。しかし、また行くことができたから見たいです。

いろいろな所に出かけて疲れましたが、とても楽しい旅行になりました。また今回みたいに、楽しい旅行ができたらなと思いました。

喜び

大川 想太

僕は、野球というスポーツの中で、様々なことを学んできました。例えば、グラウンドに入るときに礼儀を示したり、試合をさせてくれている人たちに感謝したり、そして僕はアメリカに来て、さらに一つ新しいことを学んだ。

僕は、日本で野球をしていて、アメリカに行くことが決まると分かった時、アメリカでも野球をやろうと思つていました。そして、アメリカに来て野球チームに入り、野球をする準備は整った。練習にも参加し、試合にも行った。しかし、日本にいた時より楽しくなかったのだ。確か

に、野球そのものは楽しいが、勝たなければいけないというプレッシャーもあり、少し楽しくなかった。

なぜ楽しくないのか、日本で野球をしていた時と比較してみた。けれども、特に日本と変わらなかった。変わったのは環境だけだった。僕は考え抜いた結果、活躍したら楽しくなるのではないかと思った。そして、次の試合では一つでも活躍する、何か勝ちに貢献できるようにするぞ、と思つて試合に挑んだ。僕は、その試合で活躍することができた。前よりも楽しくなった。

しかし、僕はその活躍で楽しくなったと思つていたが、全ての試合で活躍できるとは限らない。では、なぜ楽しくなかったのか、僕は考えた。僕は、活躍して喜んだ場合と、活躍しても喜ばない場合という二つのパターンで考えてみた。すると、喜んだから楽しくなったのだと分かった。僕は、アメリカに来て野球をする中で喜ばなくなつていったのだ。そうして僕は、改めて喜びの大切さに気付くことができた。

次のシーズンでは、新しい人たちが新しくチームに入ってくると思う。その時には、また新しい人たちと楽しく喜びながら、野球ができると思う。

僕は、アメリカで野球をしたことで、喜びの大切さについて改めて気付くことができた。僕は、喜ばば楽しくなるなんて当たり前だと思つていた。けれども、それが出来ていない事に気付かず、楽しいはずのものが楽しくなくなっているかもしれない。もし、そんなことがあれば、喜びを見つけることが大切だと思う。

「取つて食われるわけじゃなし」

赤堀 仁香

息を吸つて、吐いて、吸つて、吐いて……。大勢の参加者が座つて審査室に呼ばれるのを待つ体育館には、どこか緊迫した空気が流れていた。三学区内のバンドのオーデイション、「リージョン」の日がついに来た。

初参加した去年は惜しくも二位。同じ学校の先輩に負けてしまった。あの日、人一倍負けず嫌いな私は思わずその場で泣いてしまった。

悔しさをバネに、私は毎日練習を積み重ねてきた。自分でもだいぶ上達したと思う。でも、私は「どうしよう」と考え始めると不安になって自分をどんどん追い込んでしまふところがある。「八年生だから、これが一位を狙える最後のチャンスだ」「もし一位じゃなかったらどうしよう」「私は気が気でなかった。いつものように友達と他愛のない会話をしながらも、心配事ばかりが脳裏を駆け巡つていた。そのとき、ふと、母の助言を思い出した。

「取つて食われるわけじゃなし」―私が正念場を迎えるときにいつもかけてくれる言葉だ。私は目標に向かって努力した結果を重く受け止めがちなので、それを知っている母は「落ち着いて『いつも通り』できるように」という気持ちを込めて言ってくれているのだろう。

私はその言葉を思い出して、少し心が軽くなり、『いつも通り』頑張つてみよう』と思えた。そしてついに、念願の「リージョンフルート一位」の座を手に入れることができた。私はこの日のことを一生忘れないだろう。

中一運動会へ

オルミ 真理奈

今日は学校の運動会に行きました。中学校に入ってから、運動会でボランティア活動割がありました。

私の役割は「スタート合図」で、パートナーのソウタロウと二人で取り組みました。私たちの役割は、一人が旗とブザーを持ち、もう一人がマイクを持つことでした。毎回交代で担当することで、同じ回数行うことができました。「いちについて」の後、旗を水平に、「よいい」で旗を真下に、そしてブザーの音と同時に旗を真上にあげました。

まずは幼稚園児の運動会の準備を手伝い、少し休憩した後は、また準

備を手伝ったり遊んだりしました。次に、ウォーミングアップのラジオ体操を行いました。それから小学生が集まって大玉送りをしました。大玉送りとはい、紅白ごとに二列に並び、できるだけ速く最後まで大きなボールをパスする競技です。一番最後の人は、ボールをゴールまで転がします。

それから私たちは、「ヌードルハリケーン」という競技を手伝いました。これは、親子がプールヌードルを持ってコーンまで走り、その周りを走って戻ってくるというものです。そして戻ってきたら、次の人に渡します。その後、「チエッコリ玉入れ」という競技がありました。これは、小さな子どもたちが歌に合わせて踊り、踊りが終わると、すぐに振り返って、小さなお手玉をカゴに投げ入れるというものです。音楽が始まると、また踊らなければならず、それが繰り返されます。

その後、「走ってはこんでぐくってゴール」という競技が始まりました。次にトラックを走り回る「なかよくフラフープ」。一人がトラック左方向に、もう一人がトラック右方向に行きます。二人は最後に集まり、フラフープをつかみます。そして、それを持ちながら、走ったり、ジャンプしたり、しゃがんだりして障害物を通り抜けます。最後にゴールに到着。午前中の最終競技は、紅白リレーでした。

第二部、次は私たちの番です。ウォーミングアップとしてラジオ体操を行いました。それから小学生、中学生と高校生が全員集まって大玉送りをしました。続いて四年生は「デカパンGOGO!」をしました。その後、五年生は「出る杭は打たれる」をしました。その後、六年生は「目ざせ、ロサンゼルス!」をしました。次に、中高生全員で「大玉様お百度参り」を行いました。四人ずつ四つのグループに分かれ、二本の長い棒を使って大きなボールを運びます。トラックの四分の一あたりのビームを使ってボールを運び、センターに向かって進みます。それから私たちはボールを置き、他の人たちが私たちをブロックしようとしている間、小さなお手玉をかごに投げ込もうとします。ボールがバスケットに入ったら、大きなボールが上に乗っている長い棒を拾い、次の人が始めるために走って戻ります。その後、四・五・六年生、中学生・高校生は綱引きを行いました。最後に、高学年の紅白リレー、中学生・高校生の紅白リレー

ーを行いました。

運動会では、初めてのボランティア活動が楽しかったです。サイドラインでゲームを見ると、ゲームの中に入っているような気持ちになるので、わくわくします。そのうえ、スタート合図の係は、ゲームの内容を先に教えてもらっているのです。ゲームでやっていることがよくわかり、テントの下で見ているのとは、とてもちがった経験ができました。

民族学者、鳥居きみ子の生き方

三谷 侑嗣

僕は、人類学とは何かに興味を持って、鳥居きみ子の伝記を読み始めた。読み続けると、鳥居きみ子は、当時にしたら考え方が違う、稀な人だと思った。

鳥居きみ子は、人類学者の夫の龍蔵と家族とともに、野外調査で昔から伝わる生活や風習などを調べる民族学を切り開いた人だ。

もともと、明治時代の女性の生き方は決められていた。当時、女性は家庭に入り、夫を支える存在であった。そこに疑問を思ったきみ子は、もっと勉強したい、自立した人間になりたいと考える人だった。そこで、東京の音楽学校に行き、龍蔵というよき理解者に出会い、結婚をして、研究者としての道が始まった。生涯貫いた興味や信念がすごいと思った。そんな情熱が自分にもあるといいなと思う。

次に、研究者としての基本にあったのは、対象文化に対する敬意だと思ふ。例えば、きみ子は赤ちゃん連れでモンゴルに調査に行くことになった時である。きみ子は、モンゴルで教師の仕事にいたが、その方法がきみ子らしく、モンゴルの生活や文化を大切にしていた。例えば、日本流の縫い物を、モンゴル流の刺しゅうにしたり、歌もモンゴルの歌詞にしたりした。それは、モンゴルの文化に敬意があったからだと思う。また、言葉を感じることも、自然にモンゴルの生活に入るために必要だろう。馬で通っている少女との触れ合いや、子守歌を現地の言葉で歌ったこと

も、そうである。このようにして、王家の信頼を得て、モンゴルの奥地へ野外調査に行った。

きみ子と龍蔵は、他の人と違って、金銀財宝を求めめるのではなく、昔の人たちの焼き物などの遺物を求めることだった。それを、がらくたばかりに喜んでいると、周りの人があきれていたことは面白いと思つた。それでも、同行した役人は、きみ子と龍蔵は、モンゴル人をばかにしない優しい人たちだと思つていた。このように、きみ子と龍蔵たちは、モンゴル人の文化や生活を尊敬しながら、調査をしていた。

きみ子は、夫の龍蔵を助けながらも、興味や好奇心はなくならなかつた。それは、幼い頃から変わらない姿で、一生貫いた姿勢であつたからだ。そして、きみ子の集めた物や記録が学問として認められ、報われたことが良かったと思つた。

人類学や民族学とは何か、良く分からずに読んだが、とても地道な努力や根気の連続で、危険も伴う学問だと思つた。僕は改めて、地道な努力や根気が続けたいと思つた。鳥居きみ子のように、自分がやりたいことを見つけて、挑戦をしていきたい。

初めての海外、アメリカ

大平 英紀

私は、今年の夏、初めてアメリカに来ました。

最初は、初めてのアメリカ、英語でとても楽しみにしていました。けれど、学校が始まり、みんな、もちろん英語で話していて、不安になっていきました。そして、アメリカでの学校生活を過ごし、数人、友達ができました。最初の方は、その友達と話せなくて、どうしようと思つていました。最初の友達は、その友達と話せなくて、どうしようと思つていました。少しづつ友達とコミュニケーションがとれるようになっていき、とてもうれしかったです。今は少しづつ英語を理解できてきているので、これから、英語の文法や単語などの勉強をがんばっていききたいです。

また、私はアメリカでやりたいことがたくさんあります。それは、アメリカの様々な州に旅行に行ったり、その州の有名なものに触れたりすることです。私は今年の夏にアメリカに来てから、まだあまり他の州に行けていないので、これからたくさん州に旅行に行きたいです。そして、その州についての様々なことを知りたいです。他にも、アメリカの文化に触れたり、ハロウィンやクリスマスなどの行事も楽しみたいと思つました。

これからも英語の勉強、日本の勉強をどちらもがんばり、家族と旅行に行つて楽しみ、アメリカでたくさん思い出を作つていきたいです。

「人の成長と夢」

川畑 花和

私が読んだ「薫る花は凜と咲く」では、ほぼ人生をあきらめた凜太郎が、いつも明るくて元気な薫子と出会います。けれど薫子は、辛いことがあると自分の感情を隠すくせがあります。二人が付き合ひ始めてから、凜太郎は生きる意味とその楽しみを知り、薫子も自分の感情に対して、少しづつ素直になります。

読んでいて一番心に残つたのは、登場人物の成長と多くの変化が見られることです。人は、たった一つの出来事や、たった一度の出会いで変わる事ができる、ということに心を動かされたからです。特に私が好きだった成長は、怖い見た目のせいで周りからずっと誤解されていた、凜太郎の成長です。薫子は見た目を全く気にせず、彼の優しさに気付き、彼に惚れました。自分のことを大切に思ってくれる薫子を好きになる凜太郎は、彼女のおかげで心の変化が生まれ、笑顔も増え、幸せでいっぱいになります。また、登場人物のバックストーリーのすべてが印象的でした。それを読むたびに、びつくりしたり、悲しくなったり、時には笑つたりしていました。ページをめくるたびに、たくさん発見があり、一人の主人公が過去を乗り越えていく姿に、思わず、喜んだり安心したりしています。

した。

みんなが高校二年生を終えて、高校三年生になると、将来の夢や進路についての話ばかりが話題になることが多くなりました。読み進めていくたびに「○○は何になるのだろうか？」などと考え、ちよつとワクワクしていました。

私が特に印象に残ったことは、それぞれが出会った人や出来事の影響を受けて、やりたい仕事を見つけ、それを目指して一生懸命頑張っていることです。自分を信じて夢を追いかける事に後悔せず、自分の夢のため全力で取り組む事は素晴らしく、立派だと強く感じるからです。

そう考えていると、私自身の将来や、夢はどうなるのか、「この人みたいになりたい。」と思える人が現れるのか、気になってきました。今はまだ明確な目標が見つかっていないので、いつか自分の中でやりたい職業を確信できる日が来るのかどうか分かりません。しかし、お話に登場する登場人物に自分を重ねることで、登場人物と一緒に恋愛や友情を通して成長し、楽しみながら多くの大切な人生のレッスンを学ぶことが出来ました。もしできることなら、一旦、今の記憶を全部消し去り、またしばらく経ってから、もう一度読み返したいです。そうすることで、また違った感情や変化を感じ取ることができるかもしれません。